札幌市医師会 市民対話集会2011

佐藤のりゆきの
高くて大変！窓口負担がまた増える？

札幌市医師会理事
政策部長　井上善之

去る７月30日（土）に札幌市医師会館において、札幌市医師会主催の市民対話集会を開催いたしました。今回で８回目となる対話集会では、昨年度に引き続き受診抑制の原因となっている外来自己負担の高さをテーマとして取り上げました。コーディネーターは佐藤のりゆき氏、パネリストは北海道医療ソーシャルワーカー協会副会長の星野由利子氏、札幌秀友会病院の白崎修一氏、当会の今眞人常務理事に務めていただきました。

山光進会長の挨拶の後、まず今常務理事から、社会保険診療報酬支払基金と国保連合会の外来受診者数のデータ、社会保障実態調査をもとに、「自己負担割合の高さ」や「患者さんの経済的な理由」などで受診抑制が生じている実態を示していただきました。また、日本と先進諸国との医療費の比較から、日本の医療は国家の財源の投入は少ないこと、にもかかわらず世界一を誇る長寿国であるゆえんは、個人の負担に委ねているという現状も説明していただきました。

次に白崎先生は、動画を交えたケースレポートを提示してくださいました。これをもとに受診時定額負担や高齢者（70～74歳）の患者一部負担割合の引き上げなどの重要問題についてお話いただきました。軽い症状のうちに外来診療を受けることで、病気が早期発見・早期治療でき、結果的には医療費、そして自己負担が抑えられた例が示されました。しかし、初診の外来自己負担額では、なかなか病気の早期発見につながる検査等を気軽に受けにくい状況となっていることが話題となりました。

星野由利子氏からは、医療ソーシャルワーカーとして患者さんや家族から医療費等に関する経済的な相談内容の現状についてお話をいただきました。景気の低迷から仕事に就けず無保険となり、慢性疾患を抱えていても受診を控えた結果、脳卒中や心筋梗塞などを発症させてしまう中高年の患者さんが増加している事例や、医療保険と介護保険の二重の自己負担金で負担増となっている高齢者の方々の事例などが紹介されました。

佐藤のりゆき氏からは折々で、市民の目線に立って話題を日常とつなげていただいたり、焦点化したりしていただきました。そして、市場原理主義の導入により医療費の外来自己負担が高くなっていることは、今後豊かな日本の社会を築く上で大事なテーマであり、広く国民一人一人が考えていく問題であることが提案されました。

最後に今常務理事より札幌市医師会は最高患者自己負担を３割から２割に、低所得者と高齢者は負担限度額を現在の２分の１にする働き掛けを今後も続けていくことが説明され、会場から大きな拍手が送られ終了しました。

会場には約115名の幅広い年代の市民が訪れ、パネリストの説明にメモをとったり、頷きがみられたりする姿が随所でみられ、皆さんが今回のテーマである医療費負担割合について高い関心をもっていることがうかがわれました。

札幌市医師会
山光会長

コーディネーター
佐藤のりゆき 氏

北海道医療ソーシャルワーカー協会
副会長
星野由利子 氏

札幌秀友会病院
白崎　修一 氏

札幌市医師会
今常務理事